

例題

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

今昔、桃菌と云は今の世尊寺也。本は寺にも無くて有ける時に、西の宮の左の大臣なむ住給ける。

其の時に寢殿の辰巳の母屋の柱に、木の節の穴開たりけり。夜に成れば、其の木の節の穴より小さき

児の手を指し出でて、人を招く事なむ有ける。大臣此れを聞給て、いとあさましく怪しび驚て、其の

穴の上に経を結付奉たりけれども尚招ければ、仏を懸奉たりけれども招く事尚不止ざりけり。此く

様にすれども敢て不止らず、二夜三夜を隔て、夜半許に人の皆寝ぬる程に必ず招く也けり。

而る間、或る人亦試みむと思て、征箭を一筋其の穴に指し入たりければ、其の征箭の有ける限は

招く事無かりければ、其の後箭柄をば抜て、征箭の身の限を、穴に深く打入れたりければ、其より後は

招く事絶えにけり。

此れを思ふに、ころえぬ事也。定めてものの霊などのする事にこそは有けめ。其れに、征箭の験

当に仏経に増り奉て、恐むやは。

然れば、其の時の人皆此れを聞て、此なむ怪しび疑ひける、となむ語り伝へたとや。

重要古語

本||以前。昔。

辰巳||東南。

あさまし||ひどい。はなはだしい。

尚||まだ。依然として。

敢て……打消||いっこうに……ない。全く

……ない。

而る間||そのうち。やがて。

定めて||きつと。

其れに||それにしても。

(注) 母屋ハハ寝殿造りの中央、廂ひさしに囲まれた部分。

仏を懸かけ 仏の像を鏡盤や銅盤に刻んだりしたものを(懸かけ 仏)、あるいは仏画を懸けること。

征箭せいせん 戦闘用の矢。 箭柄やじり 矢の幹の部分。 征箭の身やじり 鏃やじりの部分。

問一 傍線部 a、e の動詞について、(例) にならって、活用の種類を答えよ。

(例) ラ行四段活用

問二 二重傍線部 A「此れ」の内容を簡潔に説明せよ。

問三 二重傍線部 B「征箭の験当に仏経に増り奉て、恐むやは」の解釈として最も適当なものを、次の

A、オの中から一つ選び、記号で答えよ。

A 征箭の霊験が仏に勝っていて、これを霊が恐れるということがあるとは思えない。

I 征箭の霊験が仏に勝っていて、これを霊が恐れるということがあるのだなあ。

ウ 征箭の霊験が仏に勝っていて、これを仏が恐れるということがあるとは思えない。

エ 征箭の霊験が仏に勝っていて、これを仏が恐れるということがあるだろうか。

オ 征箭の霊験が仏に勝っているのは、仏を霊が恐れるということがあるとは思えない。

解法のポイント

問一 動詞の活用の行に注意

傍線部 b のサ行変格活用動詞「す」以外は変格活用・上一段・下一段活用に含まれていないので、「す」を付けてみて、活用の種類を見分けることとなります。

a 指し出で (e) ず ↓ 下二段活用

c 寝ね (e) ず ↓ 下二段活用

d 絶え (e) ず ↓ 下二段活用

e こころえ (e) ず ↓ 下二段活用

これで a はダ行下二段活用、c はナ行下二段活用とすぐにわかります。しかし、d と e は活用の行に注意が必要です。「え」という仮名は五十音図の中に二回出てきます。

プラスα

↓ 「寝」一語で「眠ること・睡眠」を意味する名詞。この名詞の「寝」に動詞の「寝」が付いてできた語が「寝ぬ」である。他に「寝も寝ず(寝ない)」「寝も寝られず(眠れない)」「寝を寝(眠る)」のように、助詞を介してセットで用いることも多い。

ワ行	わ	ゐ	う	ゑ	を
ヤ行	や	い	ゆ	え	よ
ア行	あ	い	う	え	お

このように、「い」「う」「え」は二か所ずつ出てきますから、これらの文字が動詞の語尾に出てくると、行の判断に迷うこととなります。ただし、ア行で活用するのは「得」と「得」の作る複合動詞だけですから、「ア行動詞は『得』のみ」と覚えてしまえば、ア行下二段とヤ行下二段はすぐに識別できます。

問二 指示語の内容を確認する

本文には、「其の時」「此れを聞給て」「此く様に」「其の後」「其より後」「此れを思ふに」「此れを聞て」「此なむ」と、指示語を用いた表現がたくさん出てきます。出てくる度に、それらが何を指示しているか確認しながら読み進めると、文脈をしっかりと追うことができます。

二重傍線部Aの「此れ」が指すのは直前の「寢殿の辰巳の母屋の柱に、木の節の穴開たりけり。夜に成れば、其の木の節の穴より小さき児の手を指し出でて、人を招く事」ですから、この部分を現代語訳してみても、「此れを聞給て」の「此れ」に当てはまるように文を整えればよいでしょう。

問三 文脈を読み取る

二重傍線部B「征箭の験当に仏経に増り奉て、恐むやは」を直訳すると、「征箭の靈験が仏や経に勝り申し上げて、はたして恐れるということがあるだろうか、いや、ない」となります。

解釈するうえで大事なポイントが二つあります。

一つ目は、「(まさに)……やは」で反語になっている(「はたして……だろうか、いや、……ない」)ことです。「やは」の文末用法で反語になっていますから、「はたして恐れることがあるだろうか、いや、恐れることはない」という意味で、この文の結論としては「恐れることがあるとは思えない」ということになります。

二つ目は「恐む」の主語が何かということです。直訳では何が何を恐れているか明示されていませんから、そこを補います。

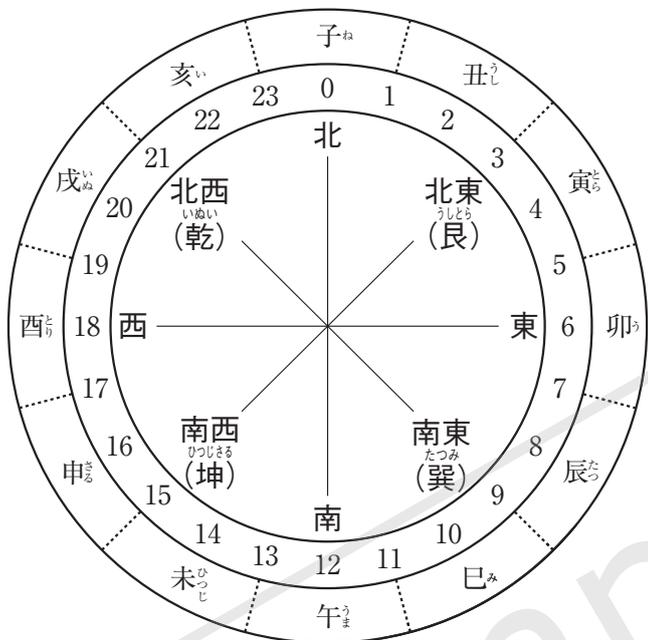
二重傍線部Bの前に起こったことを整理すると、「夜になると柱の節穴から子供の手が出て、手招きする」↓「お経や懸仏でも効果がなかった」↓「征箭を差し込んだら手招きがびたりとやんだ」ということになります。ここから、恐れる対象は「征箭(の靈験)」であることがわかります。それでは、何が「征箭(の靈験)」を恐れるかというと、二重傍線部Bの直前に「定めてものの靈などのする事」とあることから、「もの

↓鎌倉時代に完成したといわれる和漢混淆文(こんごうぶん)は、平安時代後期に生じたと考えられ、「今昔物語集」はその先駆的なものと見られている。「而る間」「然れば」などは漢文訓読から生じた語。漢語的な表現を用いて物語を進める一方、いかにも和文らしい「なむ」や「あさまし」といった語彙も用いている。

の霊」が「征箭（の霊験）」を恐れるという関係が確認できます。説話には、このように因果関係に回収されない奇譚も数多く収録されています。近代以降の言語感覚では理解しがたいこともあるので、思い込みにとらわれずに、動作の主語は何か、目的語は何かと、確認しながら正確に読み進めましょう。

古方位

例題の文章には「寢殿の辰巳の母屋」とあり、方位を表す「辰巳」という言葉が出てきました。古文の世界では方位や時刻を十二支で表していました。古方位を問われたら次のような円を思い浮かべましょう。十二分割した円の上に「子」、時計回りに「丑」「寅」「辰」「巳」……を配して、これに東西南北を置きます。

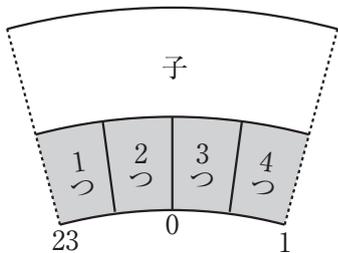


また、時刻については、例えば午前零時を「子の刻」と呼びます。およそ二時間刻みで順に「丑の刻」「寅の刻」となり、お昼頃は「午の刻」となります。現在の「正午」という言い方に名残が見られます。

古文では「北東」を鬼が来る方角として「鬼門」と表すことがある。牛の角と虎柄の着物をまとった鬼の姿は「北東」を「丑寅」と表すことに起因する。

古文では方角に吉凶があるとされていたので、「方塞がり」「方違へ」など方角に関係する語の知識が役に立つ。「方塞がり」とは凶とされる方角に目的地があつて行けないことであり、そのために「方違へ」をす。 「方違へ」とは別の方角で一泊してから目的地に向かうこと。凶とされる方角を避けるのである。

一刻を四分して「二つ」「二つ」「三つ」「四つ」といい、「二つ ≡ 30分」として考える。「子一つ」は「23時〜23時30分」を表す。



次の文章は、説話の一節で、生き埋めになっていた子供を助け出す話である。これを読んで、後の問に答えよ。

「いざ、ここ掘り出だしてみむ」と言へば、(例) 舎人男、「怖し気」と言ふを、主、「かくな言ひそ。もし、人ならば、人生けむは極めて功德ぞかし」とて、馬より降りて、この土をかきけるに、ただ今迷ひつつ埋みたりければ、いと軟らかにて、主は弓の本をもてかき去く。舎人男は手をもてかき去くるに従ひて、このうめく音近くなる。「さればよ」とて急ぎ掘るに、よくも埋まざりければ、穴の底は空きたるやうにて、この音、これが底に聞きなして掘るに、大きな菜・草・樽のふさぎたるを、かまへて引き上げたるにつきて、この音高くなるを見れば、幼き児を裸に剃ぎて掘ゑたり。「あないみじや」とて引き上げて見れば、この、我が恋しと思ひて急ぎ行きつる甥の児にてあり。「それよ」と見るに、目も暮れ、心も迷ひて、「こはいかなる事ぞ」と思ひて、かき寄せたれば、身もみな冷え渴きて、胸のものと少し暖まりたる。「まづ口にとく水を入ればや」と思へども、はるかなる野中なれば、水もなし。舎人男に「水もとめよ」とばかり言ひ掛けて、我は装束をまどひ解きて、児を懐にかき入れて、肌へにあてて、「仏、助け給へ。これが命、生け給へ」と涙の堪へあへぬをうちのごひつつ、児の顔を見れば、唇の色はなくて、眠り入りたるやうなるを、強く抱き、仏を念じ奉る験にや、唇の色、少し出で来にたりと見るほどにぞ、舎人男、帷子を脱ぎて水に浸して息も絶え絶えに走り来たる。

〔今昔物語集〕

(注) 舎人男 下級の役人。ここでは馬の世話をする下僕。 樽 枝切れ。

あないみじや ああひどいことだ。 帷子 夏用の裏地のない着物。

重要古語

な……そ……してくれるな。
極めて このうえない。
……ぞかし……であるよ。
さればよ やっぱりだ。
目も暮る 目の前が暗くなる。
仏を念ず 仏に祈る。
験 霊験。

問一 傍線部 a～f の動詞について、(例) にならって、活用の種類を答えよ。

(例) 八行四段活用

f e d c b a

問二 二重傍線部「これが命、生け給へ」の解釈として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号を○で囲め。

- ア 仏が、ご自分の使命を全うすることを願います。
- イ 子供が自分の命を全うしますように。
- ウ 子供よ、自分の寿命が尽きるまでお生きなさい。
- エ 仏よ、私の命を生かしなさってください。
- オ 仏よ、子供の命を生き返らせなさってください。

問三 本文の内容と合致しないものを次の1～5の中から一つ選び、番号を○で囲め。

- 1 主人と舎人男は、最初、誰が埋められているのかわからなかった。
- 2 子供を生き埋めにした人は、しっかりと土を盛って、子供を殺したと確信した。
- 3 子供は、助け出されるまで、穴の中でうめき声を上げ続けていた。
- 4 子供は、主人の兄弟の子供で、主人がかわいがっていた子だった。
- 5 舎人男は、子供のために水を探し出して、自分の着物に含ませて運んで来た。

問一 a 「む」は未然形に接続する助動詞。

問二 「給ふ」はここでは、尊敬語の補助動詞。従って「生け」は連用形。

問三 「ただ今迷ひつつ埋みたりければ」の主語は子供を生き埋めにした人。

次の文章は入水往生を遂げようという僧を乗せた牛車が行くなか、一目その姿を見ようと人々がつめかけているところである。これを読んで、後の間に答えよ。

さて、やりもて行きて、七条の末にやり出だしたれば、京よりはまさりて、入水の聖拜まんとて、川原の石よりも多く、人集ひたり。川ばたへ車やり寄せて立てれば、聖、「ただ今は何時ぞ」といふ。供なる僧ども、「申の下りになり候ひにたり」といふ。「往生の刻限にはまだしかんなるは。今少し暮らせ」といふ。待ちかねて、遠くより来たる者は帰りなどして、川原人少なになりぬ。これを見果てんと思ひたる者は、なほ立てり。それが中に僧のあるが、^①「往生には刻限やは定むべき。心得ぬ事かな」といふ。

とかくいふ程に、この聖、禪にて、西に向ひて、川にざぶりと入る程に、舟ばたなる繩に足をかけて、づぶりとも入らで、ひしめく程に、弟子の聖はづしたれば、さかさまに入りて、ごぶごぶとするを、男の川へおり下りて、「よく見ん」として立てるが、この聖の手を取りて、引き上げたれば、左右の手して顔払ひて、くくみたる水を吐き捨てて、この引き上げたる男に向ひて、手を摺りて、^②「広大の御恩蒙り候ひぬ。この御恩は極楽にて申し候はん」といひて、陸へ走り上るを、そこら集まりたる者ども、童べ、川原の石を取りて、撒きかくるやうに打つ。裸なる法師の、川原下りに走るを、集ひたる者ども、受け取り受け取り打ちければ、頭打ち破られにけり。

^③この法師にやありけん、大和より瓜を人のもとへやりける文の上書きに、前の入水の上人と書きたりけるとか。

10

5

読解のコツ

入水して体を捨て、往生しようという僧と、その僧を取り囲む人々が出てくる。それぞれの動作の主語が僧なのか、僧を見ている人たちなのか確かめながら読み進めよう。

重要古語

申 午後四時前後。
 まだし まだ早い。「まだしかん」は形容詞「まだし(未だし)」の連体形「まだしかる」の音便形。
 暮らす 時を過ごす。
 ……果てん……し届けよう。
 くくむ 口の中に含む。
 そこら たくさん。多く。
 童べ 子供。
 ……にや……で(あろう)か。
 「……にやありけん」で「……だったろうか」の意味。

(注) やりもて行きて〓 (僧を乗せた牛車を) 進めて行つて。 禪〓ふんどし。

問一 傍線部①「往生には刻限やは定むべき。心得ぬ事かな」を現代語訳せよ。

問二 傍線部②「広大の御恩蒙り候ひぬ。この御恩は極楽にて申し候はん」から聖が入水する気がなくなったことがわかる。その理由として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 男が聖を水から引き上げたことを、これも仏の御恩だろうなどと述べたところに、入水に対する覚悟の甘さが表れているから。

イ 聖を水から引き上げた男に礼を述べたところに、本当に入水して往生するつもりが既になかったことが表れているから。

ウ 入水が失敗したのを男のせいにして、仏の報いがあるとまで言っているところに、聖の自身に甘い性格が表れているから。

エ 理由もわからず手を差し伸べた男に極楽浄土を約束しているところに、聖のいいかげんな性格が表れているから。

オ 入水を手伝った弟子ではなく、邪魔した男に極楽の話聞かせているところに、仏教徒としてのいいかげんさが表れているから。

問三 傍線部③「この法師にやありけん、……書きたりけるとか」という後日談は、この説話全体に対してどのような効果を持つか。最も適当なものを、次の1～5の中から一つ選び、番号を○で囲め。

1 人格の優れた聖であったことを書き記し、修行によって救われたことを伝える効果。

2 人々をだますような聖は、後の世までも笑いや者になることを教訓とする効果。

3 入水すると見せかけた聖の低俗な人間性を強調し、話の喜劇性を示す効果。

4 自らの身をもって喜劇を演じ、人々の笑いを誘った聖本人が書き残したことを示す効果。

5 立派な行いをしている聖であっても誤ちをおかすことを伝え、僧の戒めとする効果。

古文常識

往生

現世への執着を捨て、死んで極楽浄土に生まれ変わることをいう。入水往生は自ら水中に身を投じて往生を目指す仏道修行のひとつのかたち。入水や断食のように自分からすすんで身を捨てることを捨身往生しやくんといい、浄土教の隆盛とともに修行人々が現れた。

〓

問一 「やは……べき」は〈疑問・

反語〉の用法。そのどちらである

かは、「心得ぬ」とあることに注

目して考えてみよう。

問三 聖は高德の僧を指す。説話は

一般に、そうした聖、高僧などの

行跡を語る仏教説話と、日常の世

俗説話に分けられる。この話はそ

のどちらに属すだろうか。